

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服政策研究事業）

分担研究報告書

様々な状況での肝炎ウイルス感染予防・重症化・再活性化予防の方策に資する研究

研究分担者 河野 豊 徳島大学大学院 医歯薬学研究部 実践地域診療・医科学

研究要旨 前年度までにおいて、歯科医療従事者向けの肝炎についての動画コンテンツを作成して、動画の有用性や内容に関するアンケート調査を行いその調査結果を学術誌に投稿し、掲載された。今年度はこのアンケート調査の結果を元に、歯科医療従事者向けの肝炎についての動画コンテンツの完成版の作成にとりかかった。次年度では動画コンテンツの完成版を歯科医師に視聴してもらいその有用性を検証する予定である。

共同研究者

舞田健夫（北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系 高度先進補綴学分野）

湯本浩通（徳島大学大学院 医歯薬学研究部 歯周歯内治療学分野）

A. 研究目的

昨年度までの研究で、「肝炎についての正しい知識」「患者への差別・誤解を生まないような配慮」および「肝炎医療コーディネーターの啓蒙」などの内容を盛り込んだ歯科医療従事者向けのウイルス性肝炎に関する動画コンテンツを作成した。本年度は、この動画コンテンツを歯科医療従事者に視聴してもらったアンケート調査結果の精査が完了したので、本調査結果の学術誌への掲載および動画の完成版の作成に着手することを目的とした。

B. 研究方法

「歯科医療従事者に知ってほしい B 型肝炎、C 型肝炎のこと」というタイトルで動画を作成した。ナレーション及びテロップ付きのスライド 80 枚の構成で動画時間は 20 分 27 秒の長さにした。動画は youtube(限定公開)にアップロードして、Forms で作成したアンケートに動画リンクを埋めた。アンケートの質問数は最大 22 問とした。対象は北海道医療大学病院歯科医および北海道医療大学歯学部同窓生の歯科医、徳島大学病院歯科医師および徳島歯科

医師会所属の歯科医であった。アンケート調査を集積して各選択肢に対する単純集計、クロス集計等を行った。

（倫理面への配慮）

本研究は介入及び侵襲を伴わないアンケート調査であり、得られたアンケート調査結果は本研究の成果発表以外には使用しないほか、個人が特定されるような情報が研究担当者以外に知られることないように厳重に管理した。

C. 研究結果

2023 年 6 月 27 日から 2024 年 3 月 13 日までの間に動画を視聴しアンケートに答えた 349 名のうち調査に同意が得られた 343 名を解析対象とした。

[1]対象者：男性は 268 名、女性は 74 名だった（不明 1 名）。年齢層は 20 歳代から 70 歳代まで幅広かった。年代の中央値は、大学病院などの勤務医では 40 歳代、クリニック開業の診療医は 50 歳代で、全国の歯科医師の年齢や年代の分布と大きな違いはなかった。

[2]動画全般：動画の内容全般については、「大変参考になった」が 274 名（79.9%）、

「やや参考になった」が 68 名 (19.8%)、「あまり参考にならなかった」が 1 名 (0.3%) であった。動画の難易度については、「とても簡単」が 54 名 (15.7%)、「簡単」が 263 名 (76.7%)、「難しい」が 25 名 (7.3%)、「とても難しい」が 1 名 (0.3%) であった。

[3]動画内の詳細な内容：

「2016 年から B 型肝炎ワクチンの定期接種が開始された」「B 型肝炎ウイルスは体外で 7 日間感染性を持続している」「HCV 抗体は中和抗体ではない」「肝炎検査は無料（一部助成）で受けられる」について視聴前から知っていたのはほぼ半分程度だった。

「C 型肝炎は近年治療できるようになった」については、79 名 (23.0%) の歯科医が動画視聴前から「知らなかった」と回答したが、60 歳代や 70 歳代などの年配者より若い歯科医のほうがその割合が多かった（20 歳代：57.1%、30 歳代：37.0%、60 歳代：13.4%、70 歳代：0%）。

患者の体液が付着した環境に使用する消毒剤は、「次亜塩素酸ナトリウム」が 210 名 (61.2%)、「アルコール」が 115 名 (33.5%)、「クロルヘキシジン」が 9 名 (2.6%)、「その他」が 9 名 (2.6%) であった。「アルコール」と回答した歯科医を年代別に分けてみると、若い歯科医の方が「アルコール」を使用する割合が多かった。（20 歳代 42.9%、30 歳代 43.5%、40 歳代 37.9%、50 歳代 33.6%、60 歳代 25.6%、70 歳代 17.6%）

肝炎患者を今後診察治療する場合に「肝炎の正しい知識を得られたので、以前より安心して歯科治療ができると思う」と回答したのは 305 名 (88.9%)、「肝炎の怖さや深刻さが重大と感じ、今後肝炎患者の歯科治療が怖くなった」と回答したのは 26 名 (7.6%) であった。症状のない肝炎患者を今後診察治療する場合に「標準予防策を徹底すれば、歯科治療が不安になることはない」と回答したのは 292 名 (85.1%)、「患者の申告だけでは感染状況が不明で、安心して診療ができない」と回答したのは 45 名 (13.1%) であった。

針刺し時の対応や、肝炎の患者を紹介できる医科系の病院やクリニックとの連携に

ついては、「連携している（自院に内科がある場合）」が 143 名 (41.7%)、「連携している（自院に内科がなく、他の病院やクリニックと連携する場合）」が 103 名 (30.0%)、「連携していない」が 92 名 (26.8%) であった。「連携していない」と回答した理由については、「どうやって連携を作ればいいのか分からない」が 74 名 (80.4%)、「近くに連携ができる病院やクリニックが存在しない」が 16 名 (17.4%)、「必要性を感じない」が 1 名 (1.1%) であった。

D. 考察（昨年度の研究報告と類似している内容については割愛した）

「B 型肝炎ワクチンの定期接種」「B 型肝炎ウイルスの体外の感染可能持続期間」

「HCV 抗体が中和抗体でない」「肝炎検査の助成」などを視聴前からすでに「知っていた」と回答したのは半数未満であり、これらの項目については現場歯科医師にとって肝炎の知識が十分とは言えない結果だった。

体液が付着した環境に使用する消毒薬については、若い歯科医師では「次亜塩素酸ナトリウム」より「アルコール」を使用する傾向がみられた。アルコールは短時間で効果を発揮するため簡便である一方、揮発性が高く乾燥蒸発すると不活化効果が減弱するため、HBV の不活化には次亜塩素酸ナトリウムの使用の方が確実である。歯科医師の年代によって使用する消毒薬が異なった原因については不詳だが、アルコールで不活化可能な新型コロナウイルスの近年の感染流行が、アルコール消毒の重要性に影響を与えた可能性が考えられた。

今後動画に盛り込むべき内容として、肝炎患者への問診の在り方である。抜歯などの観血的処置を伴うことが多い歯科診療において、肝硬変のような慢性肝疾患に伴う血小板減少や凝固因子産生低下をきたすため、出血や創傷治療に影響を及ぼすことが予想される。このため、問診等で肝疾患を含めた全身疾患について聴取して把握することは、歯科医師が安全な歯科治療を行ううえで重要である。その一方で患者自身が感染していることを気づかない無症候性 HBV キャリアの患者も一定数存在するこ

とから、問診のみでウイルス性肝炎患者すべてを拾い上げることは限界がある。さらに患者と歯科医師が信頼関係を築くことは安心安全な歯科治療を行ううえで重要であることから、患者のプライバシーを尊重しながら全身疾患を把握できるような問診票について盛り込んだ動画が必要である。本年度後半においては、すでに完成版の作成にとりかかっているところであり、次年度には本動画の有用性を再度アンケート調査で図る予定である。なお今回のアンケート調査結果の概要は日本歯科保存学雑誌2024年67巻第5号にて掲載された。

- 2. 実用新案登録
なし
- 3. その他
なし

E. 結論

ウイルス性肝炎に関する動画コンテンツを視聴した歯科医師にアンケート調査を行った。内容としては概ね良好であったが、課題も抽出することができた。今後動画コンテンツの完成版を歯科医師に視聴してもらいその有用性を検証する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

湯本浩通、舞田健夫、河野豊、植原治、安彦善裕、青田桂子、高山哲治、四柳宏. 歯科領域におけるウイルス性肝炎に関する動画に対するアンケート調査. 日歯保存誌 67 (5) : 276~287, 2024

2. 学会発表

河野豊、四柳宏、江口ゆういちろう、湯本浩通、舞田健夫、高山哲治. 歯科領域における肝炎対策の実態調査と課題解決について. 第60回日本肝臓学会総会_セッション: 特別企画 3 肝がんゼロを目指した肝炎等克服政策研究の成果(疫学、検査、連携、人材育成、人権、政策) 2024年6月14日. 熊本.

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得

なし